

令和2年度 学校評価結果（自己評価）

奈良芸術短期大学附属
聖心幼稚園

聖心幼稚園では、教職員一人ひとりが自らの教育活動や園運営の状況を振り返ることで、職員自身や園全体を見つめなおす良い機会とするために教職員の自己評価を実施している。

それぞれの自己評価結果を職員が共有することで、成果や今後の課題、改善の方法などを明らかにすることができる。この評価結果をもとに、さらに次年度を充実させていきたい。

1. 教育目標

- (1) 規則正しい生活習慣を身につけ、健康な心と体を育成する。
- (2) 知育・徳育・体育を重視した教育活動を通して、個性を伸ばし、創造性を高める。
- (3) 自己創造と個性開花を目指す、生き生きとした幼児教育をすすめる。

「個性を伸ばし、創造性を高める」

- 美的感覚を養う
- リズム感を持ち 正しい音感を身につける
- 正しい文字をおぼえる
- 国際感覚をもつ
- 基礎体力をつくる
- …生き生きとした幼児教育…



<めざす子どもの姿>

- 温かい心を持つ優しい子ども
- ねばり強くやり抜こうとする子ども
- 笑顔いっぱいの生き生きとした子ども



2. 令和2年度の重点目標と具体的な計画

- (1) 身近な人々や自然・動植物との関わりやふれあい、絵本の読み聞かせ等を通して、豊かな人間性を育てる。
 - ・ 自然環境を生かし、年間を通して身近な草花や生き物にふれることで、自然の素晴らしさに気づかせる。
 - ・ なかまと遊ぶことを通して、他の園児との関わり方を学び、一緒に遊ぶことの楽しさを感じさせる。

- ・ 年間を通して絵本の読み聞かせを行い、創造力を豊かにさせる。
- (2)「特別指導」で園児の興味や関心を引き出し、表現力や個々の能力を高める日々の活動を通して、「学びの基礎」を身につける。
- 英 会 話…楽しいアクティビティを通して、自然に英会話に慣れ親しむ。
 - 絵画・造形…美的感性や創造力を育み、進んで表現する。
 - 音 楽…楽しく歌を歌ったり、楽器を演奏したりして音感とリズム感を養う。
 - 体 操…いろんな体の動きを経験し、楽しく基礎体力をつくる。
 - 習 字…日本文化に親しみ、鉛筆や筆の正しい持ち方、書き方を学ぶ。

3. 評価項目とその取組状況

評価項目	取組内容	結果	評価所見
1. 教育内容	①保育活動・保育計画	A	・年度当初に保育年間計画を作成し、計画的に保育を実施している。主担任と副担任が情報を共有し、協力して保育を進めている。 ・園児に対して、温かく優しく支援し、根気よく成長を見守っていくことができた。 ・幼児期の終わりまでに育てたい 10 の姿を踏まえ、子どもの成長に必要な活動を取り入れながら保育を進めてきた。
	②生き生きと活動する特別指導	A	・英語（英会話）、音楽、書道、絵画、造形、体操の専門講師による楽しい適切な指導により、子どもたちは毎日生き生きと活動できている。 ・年間を通じた計画的な指導を継続している。 ・充実した特別指導レッスンになるように、職員との打ち合わせの時間も設定している。
	③絵本の読み聞かせ	A	・ほぼ毎日、絵本の読み聞かせを行っている。 ・目をキラキラさせながら絵本の世界に入り込む子どもたちの姿を多く見ることができた。 ・絵本の読み聞かせを通じた学びは、子どもたちの豊かな感性を育て、創造力を広げることにつながっている。
	④遊びを通じた学び	B	・行事の準備や制作などで十分な遊びの時間を確保できないことがあった。 ・保育者は園児の安全確保に留意しながら見守り、主体性を引き出す声かけや働きかけ、場づくりを工夫することが必要である。
	⑤年間を通じた歯磨き指導	A	・昼食をとり始める 4 月後半から 3 月まで年間を通して歯みがき指導を進めている。 ・自分で歯をみがき、最後に各担任に仕上げみがきをしてもらう。新型コロナウイルス対策として、担任はマスクとフェイスシールドを使用している。 ・「食べたなら磨く」習慣が身についてきている。
	⑥特別な支援を要する園児への対応	B	・個別の支援が必要な園児が増えつつある。 ・適切な支援ができるように、市子ども総合支援センターなどと情報共有している。

評価項目	取組内容	結果	評価所見
			・専門の医療機関等にも確認して作成した支援プランを保護者に丁寧に説明し、同意を得たうえで対応を進めている。 ・個別の支援体制が十分ではない。
2. 教職員体制の充実	①教職員数の充実	A	・1クラス20名程度の園児を主担任と副担任の教員複数配置で見守り、保育を進めている。
	②教職員間の情報共有	B	・配慮や支援が必要な園児について情報を共有し、全職員が理解して、支援を行っている。 ・職朝などで全職員が必要な情報を得て、みんなが理解して行動することが必要である。
3. 研修と研究	①教職員の資質向上	B	・ベテラン教員は若手教員を育てる意識を持って関わり、育てようとしている。 ・お互いに情報交換をしながら、他の教職員の保育の仕方を学び、良いところを見習い、自分の保育に取り入れている。 ・自主的に自分の苦手とする分野の向上を図っている。(ピアノ練習や特別支援など)
	②研修や研究の充実 (研修会後の情報共有)	B	・研修会などに参加する機会が少ないので、自ら学ぶ機会を作り、得た情報をみんなで共有することが園全体としての資質向上につながる。 ・新しい情報を得る冊子を定期購読したり、指導の参考になる資料を揃えたりして、日々の保育に活かすことが必要である。
4. 安全衛生・危機管理	①コロナ感染対策	A	・各家庭で毎朝、体温測定をしている。 ・日常生活では全園児が基本的にマスクを着用し、外遊び後に石鹸などで手を洗い、必要な時に手の消毒をしている。 ・職員が園児の登園前や降園後に部屋やトイレを消毒し、バスは乗務員が消毒している。 ・3密を避けるため、園行事の時短や簡素化、クラス別の対応などを積極的に進めている。
	②避難訓練と防犯体制	A	・6月に火災、1月に地震の避難訓練を実施し、身を守る大切さを学ぶ機会を設けている。 ・園児が登園する日は、警務員が常駐している。
	③遊具等の安全点検	A	・毎年、業者による遊具点検を実施している。 ・職員は危険なことがないかを絶えず意識し、速やかに対処している。
5. 保護者との連携	①情報の発信	A	・全保護者に登録してもらい、一斉にメール配信して情報を提供している。園児の活動の様子を紹介するためにタイムラインを活用しているが、登録者しか閲覧できないように制限をかけている。 ・毎月、園だよりを発行し、必要な情報を提供している。また、各担任がクラスだよりで園児やクラスの様子を知らせている。
	②保護者との面談	A	・保護者と密に連絡を取り、電話連絡や連絡帳、面談などで十分に話し合い、問題解決するように努めている。

評価項目	取組内容	結果	評価所見
			・4月と12月には定期的個人面談を実施して、園児について話ができる場を設けている。
	③行事への協力・手伝い	A	・無理のない範囲で、行事の手伝いやプールの着替えなどの手伝いを依頼し、行事などがさらに良いものになるように協力していただいている。

4. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」から見た評価

卒園後に学ぶ小学校は、学びがゼロからスタートするわけではなく、幼児教育で身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつなぎ、子どもたちの学習成果や能力を伸ばしていく時期である。

このことから、卒園児が小学校でスムーズなスタートを切れるようにするために、幼児期にどのような資質や技能、感性などを育む必要があるのかという視点で、日々の保育を振り返ることが必要である。

聖心幼稚園では、「幼稚園教育要領」に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を当園の教育課程及び園児の様子と照らし合わせて評価を行い、今後の保育に活かしている。

評価項目		評価	評価所見
幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿	① 健康な心と体	A	・特別指導（体操）などを通して、鉄棒の逆上がりができる園児が増え、フラフープ、跳び箱やマット運動などに自信をもって取り組めるようになってきている。 ・体を動かす様々な活動に意欲的に取り組み、根気強くやりぬこうとする園児が増えている。
	② 自立心	B	・子どもたちは大人の指示で動くことが多く、今後、遊びの場などを通して、自ら工夫したり考えたりして行動する経験をサポートしていくことが必要である。 ・信頼する先生や友だちに応援されながら、物事を最後まで粘り強く行うことで、自分の力でやり切ろうとする気持ちや、やり遂げた達成感を味わうことができる。
	③ 共同性	A	・子どもは友だちと関わる中で、嬉しい、悲しい、悔しいといったさまざまな感情を味わう。また、相手の良さにも気づくことができる。 ・年長組は共同制作として、みんなで作品を仕上げることで協力する楽しさや充実感を味わうことができた。 ・発表会に向けて心を一つにして練習し、どのクラスもみんなで力を合わせて立派に発表することができた。
	④ 道徳・規範意識の芽生え	A	・子どもは友だちと様々な体験を重ねていくことで、してよいことと悪いことの違いが分かり、自分の行動を振り返れるようになってきている。 ・トラブルがあれば、担任が丁寧に話を聞き、どうすればよかったのかを子どもに考えさせ、しっかりと振り返りをさせている。 ・バス待ちの時間など、異年齢の子どもたちが一緒に遊ぶ機会も多い。一緒に遊んだり、関わったりすることで相手の良さに気づき、受け入れようとしている。

評価項目		評価	評価所見
幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿	⑤ 社会生活と関わり	B	・母の日や父の日、敬老の日のプレゼントづくりなど、家族とのつながりを深められるように工夫している。 ・両親や祖父母など、家族から愛されていることに気づくと、子どもは家族を大切にしようとする気持ちを持つようになる。
	⑥ 思考力の芽生え	B	・子どもたちは先生をロールモデルとして、まわりの仲間との関わり方や正しい行動を学び、しだいに自分で考えて行動できるようになってきている。 ・保育者は一面的な考えを教えるのではなく、子どもたちそれぞれの多様な考えに寄り添いながら、どうすることがよいことなのかに気付かせるように支援することが大切である。
	⑦ 自然との関わり・生命尊重	A	・毎年、アサガオを植えたり、サツマイモ堀りをしたり、どんぐり拾いや昆虫館見学など自然と触れ合う機会を設けている。また、生きたクワガタやカブトムシも身近なところで観察している。 ・子どもは生き物と遊んだり、世話をしたりする中で、生命の不思議さや尊さに気づき、命あるものとして大切にする気持ちを持って関わるようになってきている。
	⑧ 数量・図形、文字等への関心・感覚	B	・数量・図形等への関心・感覚を高めるためには、身近な遊びや生活と結び付けて、数を数えたり、比べたり、組み合わせたりすることが有効である。 ・年長はひらがなを読めるようになると、身近なものから言葉探しができるようになり、ことばに対する興味や関心が高まってきている。
	⑨ 言葉による伝え合い	B	・子どもたちは、生活や遊びの中でお友達のことが分かり、自然に言葉を交わすようになってきている。 ・困ったことがあれば、自分の気持ちを相手に伝えることはとても大切である。自分から言えないときは、保育者が間に入って、気持ちを伝えられるようにしている。 ・今後、言葉による伝え合いをさらに楽しめるように、保育者はいろいろな場面で工夫することができる。
	⑩ 豊かな感性と表現	A	・子どもは、日々の生活の中で心を動かされることがあると、想像を膨らませながら、自由な感性で表現を楽しんでいる。 ・実物を見たり、触ったりして絵を描き、みんなで歌を歌ったり、合奏したりして、豊かな感性を育んでいる。 ・英語の時間では、ゲームを通して、色、形、昆虫や食べ物などの英語を自然に覚えられるようにしている。 ・年長になると、簡単な英語を使ったやり取りも経験している。

★評価項目の評価基準

評 価	評価基準
A	十分に達成されている。
B	達成されている。
C	取り組まれているが、成果が十分ではない。
D	取組が不十分である。

4. 総合的な評価所見

聖心幼稚園では、各園児はそれぞれ成長の度合いに個人差（個性）があることを踏まえ、園児にとってより良い環境を整え、一人ひとりを大切に、粘り強い指導を積み重ねている。当園の特色である少人数指導を生かして、各担任（主担任と副担任）の配慮と支援が行き届いていることから、各園児の発達段階に応じた順調な成長を見ることができている。「幼稚園が楽しい」、「幼稚園に行くのが楽しみだ」という園児が増えるのに伴い、保護者からの信頼を得られていることを実感できるようになっている。これが園児数の増加につながっているように思われる。

特色ある教育活動である「特別指導」については、発達段階を踏まえた一年間の適切な指導を継続することで、楽しみながら学びの基礎を身につけてきている。学ぶことが楽しいという園児を増やすことができているが、今後もマンネリ化にならないように、必要に応じて、特別指導の指導者と職員との打ち合わせを行い、意見交換をしていく。

数年後の小学校入学を見据えて、意欲的で主体的に活動できる子どもを育成するために、さらに充実した遊びの時間を確保し、創造的な遊びの世界を楽しませるように工夫することが必要である。

今後も全ての教育活動を通じて、より良い生活習慣を身につけ、個性を伸ばし、創造性と主体性を高める、生き生きとした幼児教育を進めていきたい。

5. 今後取り組むべき課題

（１）安全管理とできる限りの感染リスクを減らした取組を工夫する！

新型コロナウイルスの感染拡大防止について話し合い、様々な場面で３密を減らし、うがいと手洗い、換気、消毒などをこまめに行う。毎日の体温測定、マスクの着用などは保護者の協力を得られるよう注意喚起をしていく。

新型コロナウイルスの第４波感染拡大により、檀原市内でも毎日多くの感染者が出ている。このような状況から、適切に行事の延期や中止の判断をしたり、できる限り感染リスクを減らしたクラス別や時間差をつけた対応をしたりして、保護者の信頼を得られるようにする。

（２）聖心幼稚園は「しっかり遊び、じっくり学ぶ」ことを大切にする！

★月曜日は「遊ぼう Day！」→しっかりと楽しく遊べる日を設定する。

幼児は友達との遊びの中で、いろいろなことを学び、日々成長している。集団生活をする園児は遊びを通して人との関わり方を学んでいく。日常的にトラブルも起こりがちだが、「喧嘩をしても仲直りができる」という体験の積み重ねが、思いやりの芽を育む。また、自分で遊びを工夫し、ねばり強く取り組もうとする姿勢から、自分で考えて行動する主体性の芽が育つ。

子どもたちが「今日は楽しかったなあ」と思えるほどしっかり遊び、じっくり学び、満足感を得られるようにしていくことが大切である。自由遊びだけでなく、集団遊びも工夫していく。集団遊びは学級づくりに活かせる。

（集団遊びの例） 各種鬼ごっこ、ボール遊び、だるまさんが転んだ、ダンス、かえるジャンプ
※子どもが楽しめる集団遊びについて、職員が情報交換して自分の学級づくりに生かしていく。
※集団遊びのネタを出し合い、共有することが有効である。

★特別指導で可能性を引き出し、じっくりと「学びの基礎」を身につける。

特別指導「英語（英会話）、音楽、書道、絵画、造形、体操」の学習では、専門の指導者による楽しい適切な指導により、子どもたちは毎日、生き生きと活動している。

これらの学習活動を通して、子どもたちに学びの基礎を身につけ、可能性を伸ばせるようにしていく。

★男女分け隔てなく、誰とでも仲良く遊べる子どもを育てる。

固定したいつも同じ友だちと遊ぶのではなく、いろいろな友だちと遊べるようになることが、「多様性」を認め合える子どもを育てることにつながる。先入観を持たない幼稚園児は、身近にいる障害やハンデキャップのある子とも関わることで、その子の個性やちがいを受け止め、良いところに目を向けられるようになってくる。

今後も自由に遊ぶ時間とともに、「みんなで遊び」などの一緒に過ごす楽しい時間など、支援者としての意図的な場づくりと適切な声掛けを工夫していく。

★どの子にも分かりやすい指示や伝え方を工夫する。

園児にとって、言葉での指示だけでは、全ての子が理解するのは難しい。言葉に加えて、目で見てわかるものを表示したり、子ども自身が確認したりできる方法を工夫することが大切である。それは、言い換えれば、誰もが分かりやすい指示の出し方といえる。（ユニバーサルデザイン）

指導者はたえず子どもが理解しやすい指示や伝え方ができているかを振り返り、指導に活かすようにしていく。

（３）特別な支援を要する園児への関わり方について研修を深める！

個別の支援を要する園児が増えつつある。このような園児に適切な支援ができるように、必要な情報を関係機関などから得て、全職員で情報共有していくことが必要である。

常時の個別対応ができる教員はいないため、全ての職員が支援を要する園児のことを理解していることが大切である。これは、小規模の幼稚園だからこそできる強みでもある。

以上